第460号 昭和58年10月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日 第三種郵便物認可

1983年（昭和58年）
10月号（No. 460）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

幻の巨峰 ……（1）
播隆上人と丸岡城下安楽寺 ……（2）
ラダック報告（1）……（3）
人体への落雷の特性 ……（4）
海外の山 ……（4）
辻村太郎先生を悼む ……（5）
高所網膜出血共同研究者募集 ……（5）
風見武秀氏映写機映画フィルム寄贈 ……（6）
「この一本展」解説 ……（6）
山の本 ……（8）
シルクロードの白き神へ 写真集 屋久島の四季 ヒマラヤの民話を訪ねて ネパールの人々Ⅱ
東・西・南・北 ……（10）
穂高岳山荘開設六十年
白神山地視察行 大塚武氏の遭難
自然保護全国集会
お知らせ ……（12）
第三回委員会会議 ……（12）

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜　10時～20時
水・金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

幻の巨峰

―謎のマナスルの航空写真―

松田雄一

過日、本会の談話室で田口副会長と懇談中、マナスルだといって買わされた謎の航空写真のことに話がおよび、あれからもう三十年も経っているのだから、そろそろ解明されてもよい頃だということになった。

その時の田口氏の話で、小生が三田幸夫氏の「遠い山・遥かな旅」や、徳岡孝夫氏の「ヒマラヤ―日本人の記録」をもとに、山日記の栞一九六五年版に「幻の巨峰」と題して書いたものと、田口氏が東大山の会五十周年記念誌『山と友』の二四五～六ページに執筆されたものとが、喰い違っていることを発見した。

この件については、史実を忠実に残しておく必要があると思い、三田氏にお尋ねするとともに、西堀氏の事務所にもお訪ねして確認した結果、次のようなことが判明したので、山日記の栞の「幻の巨峰」を訂正旁々筆をとることにした。以下西堀氏の話……

一九五二年の一月、はじめてカトマンズ入りした西堀氏は、カマール・ポカリにあるホテルで、一人のインド人に会った。彼はインドのマルワリ族の政治工作員ということで、西堀氏の前日の行動をつぶさに知っているのに驚かされた。「ドクター西堀、あなたは王様に真珠のネックレスを献上されたそうだが、いくらぐらいのものを差上げたのか」との質問を受けたので、「あのネックレスはValuelessのものである」と答えたところ、金銭では評価できないほど高価なものと理解したらしく驚いていた。―実は木原均氏が、ミキモト真珠の社長からいただいたものを、ネックレスに仕立てたものなので、バリュー・レスと答えたのであったが……

マルワリ族は、ネパールの革命前、武器を空中投下したりしており、この時も自家用機でカトマンズに飛来したが、天候が悪くて飛べないので、一たんカルカッタに帰ろうと思っているとのこと。マナスル登山許可をとりにきた西堀氏にとっては、この一見風采のあがらない、しょんぼりした男にも肝胆相照らすところがあり、翌日INA機でカルカッタへ一緒に飛び、スペンセス・ホテルにチェックインした後、彼の家を訪問した。

彼の家は中庭のあるかなり広い家であった。それもその筈、マルワリ族はわずかな人口でありながら、インド全体の80%の財産を支配しているといわれるほどの実力をもった種族で、当時カルカッタにマルワリ族のクラブを持っていた。

いろいろ話をしているうちに、マナスルの航空写真が撮れたらよいという話になったところ、ちょうど明日コイララ首相がカルカッタに来られるので、よかったら私がその交渉をしてやろうということになった。

翌日、彼と一緒にダムダム空港に出向き、タラップの直ぐ下まで行って、コイララ首相を出迎えた。西堀氏はすでにカトマンズでコイララ首相とは面識があったが、マナスルの特別フライトについては、すぐにOKとの許可を得た。そこで急いでホテルに戻り、早速パイロットのトウーキを呼び出し、明朝フライトするよう準備を手配した。しかし翌日は天候が悪くてフライトは中止、次の日に延期せざるを得なくなった。ところが、その日コイララ首相から電話がかかり、事情があってヒマラヤン・フライトは中止してほしいとのこと。インド側の横やりらしい。

そのようなわけで、この時は結局マナスルの航空写真は入手できず、西堀氏はトウーキに撮影を依頼して帰国したが、遂にトウーキからは航空写真は届かなかった。

西堀氏が帰国してしばらくした頃、田口二郎氏が、鉄鉱石輸入関係の仕事でインドへ出かけたことを知り、JACから電報でマナスルに関する情報の入手を田口氏に依頼することになった。

田口氏は西堀氏の依頼したトウーキという飛行士とは別に、カルカッタのスペンセス・ホテルでたまたま出合った英国人の飛行士から一五〇ルピーで例の謎の写真を購入して持ち帰り、西堀氏らに報

山をきれいに ゴミは持ち帰ろう

お知らせ電話 234六六五九

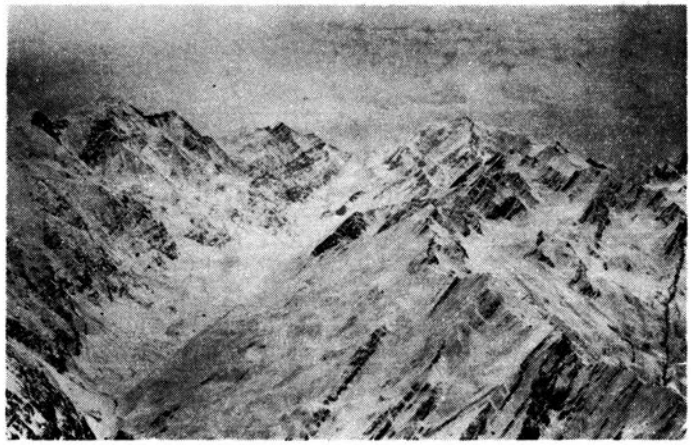
告した（『山と友』二四五～六ページ）。三田氏はこの写真を西堀氏が持ち帰ったものと勘違いして、その旨を『遠い山・遥かな旅』に書いたのであった。

ところで、私が「幻の巨峰」として解明を求めているこの写真のその後であるが、昭和四十八年頃に、当時『ネパール・トレッキング』の取材のため、ネパール・ヒマラヤを空から広く見ておられた五百沢智也氏に、その写真の一部を送り、解明を求めたことがあった。氏からは毎年年賀状のたびに、「ナゾの写真は■まだナゾです。今年こそと考えています」という便りが届くだけで、今日に至っている。

この機会に広く会員各位にも関心を持ってもらうため、会報「山」に写真を掲載し、広く情報を求めたいと思っている。

いずれにせよ、カルカッタを起点に飛んでいる飛行士の撮った写真であるから、カラコルム等の遠方とは考えられない。ネパール・ヒマラヤを中心とする五五〇〇～七〇〇〇㍍級の山ではないかと思われる。会員各位のご協力で一日も早く解明される日を心待ちしている。

なお、この写真は散逸を防ぐため、しかるべく装丁を施した後、会の資料室に保存しておきたいと思う。



播隆上人と丸岡城下安楽寺

◆

石坂　久忠

今を去ること百四十八年前、即ち天保六年（一八三五）二月四日付、河内邑(村)（富山県大山町河内村、現在は廃村）「川内道場住」宛ての播隆上人の手紙に、「北国寒風ノ荒雪ヲシノキテ、丸岡城ノ安楽寺ニ宿シ、亦復城下ヨリ廿町斗リ隔テ、護城山ト言アリ、此山ノ半腹ニ錫ヲトヽメ、国内ノ里ハ足下ニ見、三国ノ滄海ヲ遥ニ詠テ、冬安居念仏三昧ノ勤行勇猛ニ座シヌレハ、城内山里共ニ貴賤気腹ノ参会セシムルコトハ、宿縁トイヘトモ、念仏ノ利益広大ニシテ、一切衆生ノ気ヲトヽノヘタマフコソ不思議ナレト云モヲロカナルモノナリ」云々……とある文章の丸岡城下安楽寺は、福井県丸岡町石城戸にある。

この寺は、安誉上人の開山、天正元年（一五七三）の創寺で、現在は光明山宝樹院安楽寺といい、浄土宗の名刹である。数次にわたる火災や、戦災地震で、過去帳なしとのこと。

播隆が宿した記録もなく、残念ながら当時の詳細を知ることができないが、冬安居（アンゴ）念仏三昧の勤行は、護城山（一七四㍍、その当時は城台山といったことも）であったことは確かで、この山の山頂に近い広場には、金比羅宮と八幡社がある。この金比羅宮は常念仏堂とも称し、八十八洞よりなっていた。金比羅宮は天保六年に竣工されているが、この竣工と播隆の巡錫止め、冬安居と関係付けるのは無理であろうが、資料がないため招請による冬安居なのか、ゆきがかりの功徳のためだったのか、今後の研究に委ねなければならない。

ラダック報告（一）

山本朋三郎

『パンジャブ・ヒマラヤへお出かけだった由、女護ヶ島ならぬパンジャブ州には美人多く、恙なく御帰国なれしや……麻生老爺』

留守中、恐れ多くも麻生武治大先輩から、暑中見舞を兼ねた行状見舞を頂戴して、フト、そんなに美人は多かったのかな?、と首をかしげた。何しろスリナガルの日中は猛烈に暑く、ほとんどホテルのシャワー室を出たり入ったりで、夜半、九時半すぎにやっと夕食を摂りに町に出かける仕末。夜間も天井の扇風機は暑さを掻きまぜるだけ。暑さと現地食にどうしてもなじめない戦前派の私は、結局毎晩ボイルド・ライス（日本流の焼めし）がほとんど。これも印度式の香料が入っていて食欲を減退させる。63才の老人には、やはりミソ汁と漬物が一番。帰国まで何度夢見たことか。

予定に従い、コラホイ山（五四二五㍍）の見える、ライデルワットまで、行ける所までタクシーで、先はポニーの背にゆられて登山を計画。乗者人員制限、スピード制限もある印度と思うが、戦後の神風タクシーそっちのけの運転にキモを冷して山に入る。車をおりて、途中美しい渓谷と急流の小さな部落、アルーで一泊。前以て紹介してもらったバンガローの名刺には、プール有り、温水シャワー、温かい室とベットとある。現実は、河の流れを堰き止めた浅瀬、バケツ一杯のお湯、毛布二枚のことである。看板と大きな違いも、印度に来ると、こんなものかとアッサリ認めてしまう習慣が身についてしまう。二食付56ルピー（約一三六〇円位か）。ノミ・ダニには私は喰い付かれなかった。

麻生大先輩の言われるカシミール美人の一人に出会う。目鼻通り気品高い娘。裸足の脚も美しい、バンガロー主の娘。何故か、二日滞在の食事のたびに、黙って我々の食卓の端に、ジッと座って話かけるでもない。尤も彼女の現地語と日本語とでは動物園のクジャクと猿の鳴声に等しい。通じるわけがない。出発の朝、堰を切って話す彼女の現地語で判ったのはたった一つの単語。『ハンドバッグ』。二日間の食卓での彼女の無言はどうやら、ハンドバッグを欲しいと言うことらしい。11才の娘さんへ、何で初めて会った63才の日本爺さんがプレゼントの義務があるのか、判断に苦しむ。我々を案内したタクシー運転手が彼女の伯父であり、百円ライターをプレゼントしたのを見ていたせいかも知れない。或いは、前に泊った日本人が気前がよかったのかも知れない。

ともあれ翌日、ポニーの背にゆられての道中、今冬、エベレスト登頂後、不幸にも遭難した加藤隊員とも同行したし、またK2の日本隊にも同行したと言う、チェリン・ナムギャル氏と、チョコレートを分けながら、つたない英語で話合う。イギリス人トレッキング隊15名程を案内して、コラホイ山を越え、ソナマルグ部落への一週間の途中と判る。キャラバンのポニー荷隊を、せまい山路をさけて立っていたら、チョコレートを彼が差出し、『ジャパンか?』と言うのが長話のキッカケ。

急ぐ彼等を先にやり、山中のゆるい傾斜の草原、リデアルワットに早い夕方到着。我々の案内人は我々の外に客のないせいか、バンガロー主、自からの案内。62才で発音を聞く限りでは、名はチャップリン（CHAPRIN）。おや、なつかしい名前だと思ったら、料金計算にセコい白ゴマ混りの彼の顔も、人の良さそうに見えて来た。第二次大戦にイギリス兵の炊事当番として、ビルマ戦線に従軍したと言う。それ以来日本びいきと言う。午後の霧ションにぬれた衣服を干すべく、彼がタキ火を起してくれた。

こんなにも居たかと思う程、他のバンガローや天幕から、イギリス人、オランダ人、フランス人、イタリー人、西ドイツ人、オーストリヤ人の各グループが、三々五々、靴下、シャツを持ってタキ火に集る。同行の息子の手助けで、どうやら半分位は各国の人達と話が通じ、楽しいタキ火の集りとなった。

驚いたことには、これら外国の人達の持つカメラは、ストロボ・ズーム内蔵の高級カメラである。キャノン・ニコン・ミノルタ・オリンパス・ヤシカ等々、皆日本製の高級カメラ。36年前購入の古色蒼然、写すたびに沈胴を引張り出し、ピントファインダーでピントを合せて、目盛、露出を一々考えながら、やおら、ファインダーをのぞいてシャッターを切る、古い古い型のライカDⅢを見て、『見たことのないメズラシイ!』とフランスの女教師の叫び。

古くさい、神武天皇が見ても、『これは古い!』と言う程の旧式カメラを持った、63才の日本爺さんの、気のめいりを救ってくれたのは、『今日では余り見受けないが、ライカは我がドイツのほこりです!』と言ってくれた、ニコンを持っていた西独の若い中学教師。

（続く）

播隆が冬安居中、国学と和歌に長じ、産業の振興特に綿織業の奨励につとめ、四国巡礼を行ない、霊場の土を持参しては、札所の拝石（礼拝石）の下に埋め、八十八番の観音堂を造営した人物に、福島恵喜子（一八四九没）があった。観音堂を造営する人であったぐらいだから、仏教信仰の厚いものがあったであろうし、観音堂のあるところを、在家の人々は護城山とも、又は常念仏堂をめぐる八十八洞の周りを「番留山」ともいって、仏教にまつわる浄界である。そこで常念仏堂と番留山との関係に播隆を結び付けるのは、常人の考えであっても、不思議ではないだろう。

この浄界へ登るには、四百十三段、めい想の石段を踏み、注意して登らなければならない。「石のみ」の目も古く、ところどころに「岩たけ」がつき、中腹には石仏が並び、丸岡を一望することができる。石段を登りつめた広い場所に、金比羅宮と新しい八幡神社（明治末年に山上に移す）が並び、当時を偲ぶのに充分である。

しかし、安居の意義付けはどうにせよ、再度槍ケ岳への準備のためであったのか、観音堂建立のための祈願でもなかろうに、そして生家へ送る手紙は飛脚で河内邑へ。この年七月二十五日、親父釈順信の往生を知ることになる。無常というべきであろう。

人体への落雷の特性

講師　北川信一郎氏（埼玉大教授）

山での落雷の脅威は、私たちの関心の高い問題であるが、北川教授は実験によっていくつかの新しい問題点を明らかにされた。以下は氏の講演の要旨。登山中の落雷について、参考にして頂きたい。

（参考文献『暮しの手帖』78号）

◇直立する人体は、頭から両足への全低抗三〇〇～五〇〇Ωの導電性物体として応答。皮膚の絶縁効果は皆無で、衣服・雨衣・ゴム長靴の絶縁も無効果。

◇三つのステージ、(a)体内電流のみ、(b)体内電流と多数の部分沿面放電、(c)体内電流と沿面フラッシュオーバーがあり、(b)ステージ止りの例が多く、この場合が死亡率最高である。

◇死因は、体内電流による呼吸停止、心停止。

◇部分沿面放電、沿面フラッシュオーバーは火傷、皮膚剝離、電紋を生ずるが、これらは皮膚表層の熱傷で後遺なく治癒する。

◇身体につけたり、持ったりする金属の周辺には、集中的に部分沿面放電が生ずるが、これには致死効果は全くない。

◇落雷を誘引するのは、地表から突出している人体そのもので、特に頭より上方に傘その他の物体を突出させると、それら物体が絶縁物であるなしに拘らず、雷の誘引効果は増大する。

◇樹木、避雷針の設置してないポール、マスト、煙突等、高い物体の近傍は、二つの理由で危険度が高い。第一に、これらの物体は人体より落雷を受け易い。第二に、これらの物体に落雷すると、側撃により落雷電流の主流が人体に移行する。

◇人体への落雷安全対策と緊急避雷法

・姿勢を低くし、絶縁体であっても、身体より高くものを突出さない。

・山頂、尾根、屋上その他高いところから早く離れる。

・大勢一緒にいたら散らばる。

・樹木や枝、煙突、電柱等、高いものから必ず二㍍以上離れる。高さが五㍍以上あれば二㍍以上離れて、そのてっぺんを四五度の仰角で見る範囲で姿勢を低くする。

・金属を捨てても安全にならない。ゴム長ぐつ、雨合羽、テントのシート等も、避雷の役に立たない。

科学研究委員会第18回講演会
昭和58年6月24日（金）夜
JACルーム、出席者21名
（中村　純二）

海外の山

過密化

片山全平

今秋（一九八三年）のポストモンスーン期のネパール・ヒマラヤには十五カ国、五十四隊が入山すると、ネパール政府は発表、同国山域の盛況ぶりを伝えている。昨秋は四十二隊であったが、最高といわれた一昨年が四十四隊であったから、その記録をしのいだことになる。

そのうちわけをみると、エベレストは日本から二隊、アメリカから一隊。日本からの二隊は、山学同志会（川村晴一隊長ら五人）の小西政継らの南西壁登攀隊とイエティ同人（吉野寛隊長ら五人）の南東稜隊。南西壁は新ルートの開拓が注目されるが、イエティ隊の吉野は、ダウラギリ主峰、アンナプルナ主峰、チョゴリ（K2）についでエベレスト登頂と、ジャイアンツへの意欲を燃やしており、同隊はさらに明春、ローツェ南壁の計画を進めている。アメリカ隊はジェームス・サノを隊長とする十六人で、西稜ルート経由である。

ついでながら、チベット側からも三つの隊が同時期のエベレスト（チョモランマ）をうかがっている。スペイン隊（コンラッド・ブラチフォール隊長ら十二人）の北東稜、アメリカ隊（ジェームス・モリゼー隊長ら十人）の東壁（カンシュン氷河源頭）。またフランス隊（ヤニク・セニュール隊長ら十二人）の西稜。一説によると、フランス隊は冬期におよぶ計画ともいわれ、西稜経由の新ルートは注目されよう。

ジャイアンツ・キラーのメスナー（三八）はダウラギリ主峰の許可を取得している。かつて試みた同峰バリエーション南東壁の新ルート開拓の失敗から、今回の西面壁登攀に賭けている様子で、このルート開拓は注目されるが、その後の情報によると、英ダグ・スコット（四二）のローツェとともに、来シーズン回しになったとも伝えられている。

エドモンド・ヒラリー卿の息子、ペーター（二八）がマカルーに挑む。父親が、エベレスト初登頂後の一九六一年に試み、クレバスに転落、九死に一生を得たことがあり、ヒラリー家にとっては忘れ難いマカルー。八千メートルの登頂はペーターにとっては初めての体験である。

未踏峰ではヒムルン・ヒマール（七一二六メートル）の弘前大隊（黒滝淳二隊長ら七人＝うち岡山大、慈恵医大、愛知医大の混成）。昨年は六八〇〇メートルで断念、同隊にとっては再挑戦で、過去日本隊三、オランダ隊一が試みている。

以上締めて三十九座におよぶそうだが、これも最多ということである。ネ政府としては、増加の傾向をこのましい状態とするであろうが、パキスタンでは、ナンガパルバットに日本隊五、オーストリア隊一が登頂を目指した。そのうち富山県山岳連盟隊が、日本人として初登頂に成功したが（オーストリア隊も）、登歩渓流会（国井治隊長ら十人）、福岡登高会（新貝勲隊長ら十六人）から犠牲者四人が出た。協調の成果として期待するところが大きかっただけに残念である。

ヒマラヤ登山はますます過密化する傾向にある。欧州アルプスの例をとるまでもなく、これは歴史的にも必然性のある現象で、驚くにはあたいしないが、要は自然保護とか遭難対策の面で、これにどう対処していくかが、登山人の課題となる。

追悼

名誉会員 辻村太郎先生を悼む

佐々保雄

去る七月十五日、先生の訃報をうけた時、私は、ああやはりと思った。昨春の秩父宮賞の授賞式の折、強く曲がられた腰で、耳も遠くなられてか、大声で受賞者の岡山俊雄さんに、しきりに質問しておられた。その時の何か痛々しいお姿に、先生も随分弱られたな、と感じたからであった。

先生は明治二十三（一八九〇）年のお生れだから、享年九十三歳ということになる。一高を経、大正九年東大の地質学科を出られ、間もなく新設の地理学科の講師になられた。学科担任の山崎直方教授の下での助教授時代は長かったが、昭和十九年に教授に昇進、二十六年定年で退官された。その間、日本地理学会の会長を始め、日本学術会議会員、国立公園中央委員会、文化財審議会などの委員をされ、また日本学術会議の地理学研究連絡委員会委員長として、海外との交流に努められた。

先生の御専門は地形学で、日本での草分けであった。その卓抜した語学力で、海外の論文を次々と紹介され、特にディビスの地形輪廻論に基く地形発達史観の普及に貢献された。著書には『地形学』『新考地形学』『断層地形論考』などがあり、中でも『地形学』は、当時の若い研究者のバイブル的存在であった。また随筆『晩秋記』では、流麗な文章と精緻な観察、色彩感の溢れる描写に感嘆させられた人も多い。

論文としては、日本における氷河・火山・海岸・断層などの諸地形に関するものがある。特に若い学徒として、山崎先生とともに、日本アルプスにおける氷蝕地形の存在を主張されたのは、日本における氷河現象研究史上に一期（明治初年の外人による予報的な報告を第一期として第二期にあたる）を画するものであった。ただ、その当時はこれを疑う人も少なくなかったのが実情であった。

しかし、昭和十年代に入り、中部日本の高山地を始め、南は台湾、北は北海道や朝鮮にも続々氷蝕遺跡のあることが判り、「高位置氷河説」は多くの人々の是認を得るに到った。

一方、当時海抜数百米の低い所にも氷河作用が及んだとする説も現われて、一大論争を呼び、氷河研究の第三期を招来した。先生はこの「低位置氷河説」には終始首を傾げておられた。しかし、晩年になられて、「君、これは三四郎の池（東大構内、漱石の『三四郎』に出てくる）のほとりで出た氷蝕礫だよ」と、豆蒲団にうやうやしく戴せられたいくつかの礫片――なるほど筋はついている――を見せられて、「やはり日本でも氷河の拡がりは大きかったんだね」と、長々と話され、閉口した弟子達も少なくなかった。

先生は辻村伊助氏と従弟だった関係から、会創立の翌年、若くして日本山岳会に入られ（会員番号二一）、かなり飛騨山脈などを歩かれたらしい。その成果が上記の氷河地形存在説となったわけである。中年になられてからは、国立公園の調査や、設定などでかなり方々を歩いておられるが、晩年には御健康のせいもあって、あまり山行はされなかった。本会は、先生の多年の山岳地形に関する御貢献に対し、昭和二十八（一九五三）年、名誉会員に推している。

ここに少し私事を挟むを許されるならば、私の大学の二年生の時のこと。北大山岳部の山県浩君（本会会員）の撮って来られた日高山脈のエサオマントッタベツ岳の写真を見て、「ああこれは」と思い、先生に御覧に入れたことがある。先生は早速それを病床に在られた山崎先生に御目にかけたところ、大そう喜ばれたとのことであった。その後、私も片手間ながら日高・台湾・朝鮮などの氷河遺跡などを手がけ、いささかながら先生の学恩に報いることができたかと思っている。

先生の蒔かれた日本における氷河研究の種子は、戦後「第四期」に入り、若い多くの研究者たちの間に実って、単なる遺跡分布論から、地形発達論、気候論、さらに量的・実験的研究に及び、近年では海外の氷河研究にまで手が延びている。この点で、かねて先生がその発展に満足しておられたが、後進の向後一層の研鑽こそ、先生のもって冥されるところであろうと思う次第である。

高所網膜出血分類の共同研究者募集

ハーバード大学の Dr. Michael Wiedman は、高所網膜出血（HARH）の分類を手がけているが、多数のデータが必要なので、これから高所登山隊に参加しようとしている医師で、この問題に興味ある人々に共同研究者になってくれるよう呼びかけている。

彼は、眼底鏡検査は医師なら誰でもできることだし、医師でなくとも医療従事者ならちょっと練習すればすぐできるといっている。この研究目的は、網膜出血と高山病ないし脳浮腫との関係を明らかにすることにある。情報はすべてコンピューターで処理され、データは参加者全員に配られる。軽量携帯用眼底鏡は多分彼に申しこめば手に入ると思われる（と書いてあるが日本ではどうか不明）。参加手続、報告書の書式その他、詳しいことは直接彼に申しこまれたい。連絡先は次のとおり。

Dr. Michael Wiedman
Harvard Medical School, 243 Charles Street, Boston, MA 02214, U.S.A.

《本文のソース＝「サイエンティフィック・ノーツ」アメリカン・アルパイン・ジャーナル、一一三ページ、一九八三》

（中島 道郎）

16ミリ映写機 記録映画フィルム 風見武秀氏から寄贈

本会ルームには、16ミリ映写機の設備がなく、前からその設置が要望されていたが、このほど、会員で山岳写真家の風見武秀氏が、同映写機とテープレコーダーを寄贈して下さった。またこれと同時に、風見氏が早くから製作・所蔵されていた貴重な映画フィルムも、多数寄贈いただいた。

フイルム委員会では、これらの機材を早速、委員会活動に利用させていただき、映画フイルムは、フイルムライブラリーに加え、会の貴重な資料として、永く保存管理していきたいと思っている。この機会に、風見氏にあらためて厚く感謝申し上げる。

なお寄贈いただいた機材および映画フイルムは、左記の通り。

一、16ミリ映写機（スピーカー付）
　一台　ベルハウエル製
二、テープレコーダー　一台
　解説用テープ付、ソニー製
三、16ミリ山岳映画フイルム
1　奥秩父　山梨県観光映画
2　八ケ岳　〃
3　南アルプス　〃
4　富士五湖　〃
5　ジュガール・ヒマール一九五八年深田隊　一、二巻

「この一本展」解説

第二十回
二月十九日～二十一日

『続スウィス日記』 辻村伊助 自筆原稿

藤島　敏男

本会創期の大先輩辻村伊助氏が、今から四十一年前、関東大震災の折、箱根湯本で山つなみのため歿された。後数年たって、屋敷跡発掘の際、奇跡的に地中から発見された、この自筆原稿は、高野鷹蔵氏の許に保存された。

昭和五年『スウィス日記』完本刊行（梓書房版）のとき、『続スウィス日記』は始めて活字となった。その後まもなく、高野氏の委嘱を受け、藤島が、丸善・中村春太郎氏を通じ、東都一流の製本師に装釘させ、高野氏が、故辻村氏と最も親交のあった小島烏水氏その他の山仲間の、或は文を、或は画を、つぎつぎにこの稿本に集められた。

戦後、高野氏がこの稿本の外函のため、ふるく南の国より招来されたマホガニー材を、会員佐藤久一朗氏に託して、これを作成し、本会図書室に寄贈された。

本会の宝物の一つともいうべき、この稿本・外函は、故高野氏の亡友への温かい心によるものであり、高野氏と最も縁の深いものである。

（一九六四年十二月二日）

創立会員山川黙氏に献呈された 小島烏水の『日本アルプス』

稲垣　純男

この本は、昭和二十七年ごろ、牛込柳町の小さな古本屋の片隅でみつけた。第四巻が欠けていて、値段は僅か七百円であった。岩波新書がまだ百円の時代である。

長い間店ざらしになっていた本がようやく捌けて嬉しいのか、主人夫婦がこもごも語るところによると、あまりにも汚れて綴じも破損し、お客が手に取ろうともしないので、製本屋に修理させ、外函も自分たちで作り直したという。新しい外函の字は、「もとの函の字に似せておとうさんが自分で書いた」とは、おかみさんの言。

その場では、売る方も買う方も気がつかなかったが、持ち帰って開いた第一巻の見返しの裏に、

To Mr. S. Kawada with the author's compliments

との達筆なペン書きの献辞をみつけた時の驚きは、三十年たった今でも、まだ鮮やかに思い出すことができる。調べると第三巻にも、

烏水生　山川黙兄に献ぐ　大正元年八月

との献辞が、毛筆でしたためてあった。

当時まだご存命だった山川黙氏が、なぜこの本を手離されたのかは判らないが、大部分のページがアンカットのままだったことから察すると、あまり熱心な読者ではなかったように思える。南アルプスの紀行文だけを読み、あとの文章には目もくれない、という感じなのである。

烏水から摂取するに値するのはただ南アルプスだけ、と割り切ってしまったようなページカットぶりは、事実だけを重んずる、いかにも自然科学者らしい読み方だと言えようか。

（稲垣純男氏特別出品）

The Pioneers of the Alps

成瀬　岩雄

今は登山史上の珍本となっている一八八八年出版の、英国の C.D. Cunningham と Captain Abney F.R.S. の共著の "The Pioneers of the Alps" は、当代一流の錚々たる登山家が雇傭者としての立場から、アルプス一流のガイド連中の経歴、人物評について筆をとっている得難い書物である。例えば、言わずとも知れた、クリスチャン・アルマーについてはクーリッジが、フランシス・デヴーアッスーについては、フレッシュフィールドが筆をとるといった具合に、コンウェー、デント、チャールス、エドワード、マッシュース、其他、アルプスの古典に興味を持つ人なら、誰でも知っている様な登山家連が、各々その親しいガイドについて、写真入りで寄稿している分厚な書物

6 〃 N・T・V
7 〃 N・T・V
8 ランタン・ヒマール
9 ヒマラヤ、カトマンズ、ネパール 各カット一巻
10 剣岳 岩と雪の王国
11 氷河の旅 ジュガール・ヒマール一九五八年
12 ニューギニア（カラー）一巻
13 〃（モノクローム）二巻
14 バンコック水上部落
15 ラングーン・パコダ
16 インドの旅
17 アンコールワット
18 冬の八ケ岳
19 アルプス飛行、日光・尾瀬
20 日光・白根山、スキー
21 春の鹿島槍
22 ザイラーの日本訪問、石打スキー場
23 イタリーの山スキーと地中海 フオスコ・マライニー
24 銀界の弥次喜多
25 ドイツ・スキー
26 スキーへの招待 八甲田
27 冬の北海道 十勝・大雪山スキー
28 剣岳にいどむ（N・H・K）
29 岩は呼ぶ（今泉プロ）
30 富士五湖（モノクロラッシュポジ）
31 ジュガール・ヒマール（モノクロ、トーキー）
懐かしの山（モノクロ、トーキー）

（フィルム委員会）

で、小島烏水さんの言葉を拝借すれば「古典から抜け出した様な、とぼけてゐるやうで、しかも毅然として峻峭な顔を並べてゐるのを翻しながら――名案内人が続々出て来ると、ひゐき役者が舞台に出て来た様に嬉しくて堪らない」、そんな書物なのである。

この書物の巻尾に附録として、それ迄にアルパイン・クラブが受付けた入会申込者の登山歴の数例が載って居り、勿論、トップの者は百近くのアルプスの名だたる山、JOCHの名前が網羅されて居り――但し、人名、年代は記載されて居らず、唯、山の名前、JOCHの名前だけ――「成程これならアルパイン・クラブの会員にでも当然なれるだろう」とうなづかせるのであるが、一体、この凄い登山家は誰なんだろう――と、よく松方三郎さんと何んとか判りたいものだねと話し合ったものだ。しかしこの登山家の事は第一版の書には掲っているのであるが、一応、ドイツ人だとは書いてあるだけに、尚更誰だか知りたいものだと話し合ったものだ。

最近、この人はドイツ人ではなく、イタリア山岳会のヴィットリオ・セラーである事がわかったが、彼の祖父が曾てイタリアの首相をやったり、イタリア山岳会の創立者であったりした人物である事を知り、マムさんのアルパイン・クラブ・レヂスターを翻いて見ると、数頁に渉る詳細な登山歴が列記されてあるのを見て、小生にとっては何んとも云い知れぬ嬉しさを感じたのである。永年に渉る悩みが溶けた様な気がしたのであるが、同時に松方三郎さんが居られないのが、如何にも残念である。

このセラーについては、冬期のマッターホルンの初登頂者である、とアルパイン・ジャーナルに特記されて居り、アルプスは勿論だが、フレッシュフィールド、ドンキンについて、ヒマラヤ、コーカサス、アフリカの山々に足を踏み入れているのを見、しかも山岳写真の大家であると記されてあるのを見て、益々嬉しくなり、松方さんを思うの情、もだし難い次第である。

曾て小島烏水さんが、山岳書に限らず、第一版に次いで第二版が出る様な場合、よく一部内容が違う場合があるが、こんな場合は両版のものを求めて置く可きだーと云って居られたが、これで小島さんの言に有難く感謝の意を表したい。

ウィルヘルム・シュタイニッツァー『日本山行』
Japanische Bergfahrten von Wilhelm Steinitzer

宮下 啓三

一九一八年、ミュンヒェンにて刊行。A5判一二〇頁、写真三四葉、地図二葉。

筆者の正体は不明だが、「総司令官アルブレヒト・フォン・ヴュルテンベルク公閣下に謹んで捧ぐ」とあるので、西南ドイツ出身の軍属であったと察せられる。序文に「日本で私が訪れた場所はごく僅かでしかないが」とあり、長期間にわたって日本に滞在した人でもないらしい。第一次世界大戦が一九一四年に勃発し、日独両国は敵対関係にあった。その時期に、敵国日本の魅力的な山々について、親しみをこめて書くというあたりが、本書のユニークさなのであろう。

日光（第Ⅰ章）、九州（第Ⅲ章）、塩原（第Ⅳ章）については、それぞれ短く書かれている。本書の八割を占めるのが、日本アルプスの山々への旅行の記録である。

それによると、一九一一年はじめに、筆者ははじめて日本の土を踏んだ（12頁）。その数年前『日本アルプスの登山と探検 Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps』という題の英書によって、日本の山々に惹かれていた。そして、松本から富山にむかって日本アルプスを縦断することを目論んだ。

その旅は、一九一一年七月十七日朝八時四十二分、新橋駅発の汽車旅ではじまった。下車地は甲府駅。翌朝、日野春から甲斐駒をめざす。甲斐駒登頂のあと、松本へ。七月二十四日夕刻、上高地着。

「穂高山」に登頂とあるが、写真から察すると、前穂高岳に登って下山したのであろう。宝川温泉経由で笠岳へ。

日本アルプスの旅の後半は、八月二日夜の富山での宿泊からはじまる。ザラ峠、針の木峠についての記述あり。ついで戸隠と妙高山、ついで「信州の駒ケ岳」（木曽駒）へと舞台が移る。

本書の本文中の最後の日付は、一九一一年十月十四日である。この日筆者は朝鮮から日本の長崎に着いた。そして九州北部の旅がつづられる。

英語による当時の日本人とのコミュニケーション、当時の山小屋と諸価格の記録などが興味深い。

新刊の本　山紹介

シルクロードの白き神へ

慕士塔格北峰初登頂の記録

七四二七メートル

スビダーニエ同人　編

一九八一年の夏に、川崎市の中学校教師によって組織されているスビダーニエ同人が、中国新疆ウイグル自治区の南疆に位置する、崑崙山脈第四位の高峰慕士塔格北峰に派遣した、崑崙攀登川崎市教員隊（四名）の公式報告書である。

この年、崑崙山脈西部の山域に入った登山隊は、京都カラコルムクラブの公格尓（コングル）峰七一九m、防衛大学校山岳会の公格尓九別峰（コングルチュビエ）七五九五mと、この隊の三隊である。それぞれの山が、崑崙山脈を代表する高峰であるが、そのなかでも慕士塔格峰は、絲綱之路（シルクのみち）の歴史の中で「氷山の父」と呼ばれ、古くから山麓の民や旅人から崇められてきた山である。

本報告書の内容は、第一部、心象スケッチ（北京から山麓の遊牧部落にいたる人と風物、登山など坂原忠清氏の詩三六編を集録）。第二部、崑崙へ（計画書趣意、崑崙通信、ベースキャンプ、速攻七日、頂へ、登山報告、中学生の絵の交換会）。第三部、資料（行動概要、準備日誌、各新聞社のニュース収録、記録＝国内とアンデス、高山病と低圧トレーニングの記録、予算書など）からなっている。

登山については、第二部・第三部の記録をもとに、坂原隊長の行動を高山病との「からみ」で追ってみると、七月二八日、BC（四八〇〇m）設営、呼吸苦しく頭痛。翌日スバシ部落三八〇〇mまで下り休養。三一日、再度BC入り、軽い頭痛。八月一日、北西稜上五六三〇mにC1設営、頭痛のためBCへ下る。二日、BC停滞、頭痛消える。三日、BCよりC1へ、夜発熱三八・五度、アスピリンを飲みよく眠る。四日、熱、心搏数高くBCへ下る。五日、熱、心搏数下がりC1に入る。六日、C2（六二八〇m）設営、夜微熱。七日、C2より攻撃、比高一一四七m。七〇〇〇mを越えたあたりから身体が重くなり、肺がキリキリ痛む。頂上が近づくにつれ、幻聴や意識が消える感じにおそわれながら、松井公治隊員とともに頂上に立つ（一四日林田孝夫、高橋純一の両隊員も登頂）。

この隊が、BC設営から一一日間という早いペースで登頂できた原因は、四名全員が高所登山の経験者であること。例えば、第一次登頂者二名の海外登山歴をみると、坂原氏の場合、一九七七年アフガニスタン・コーイダラーツ峰五五七八m、七九年パキスタン・ゴルゾム峰六二一六m、八〇年ペルー・ワスカラン南峰六七六八mの三峰を登頂。松井氏は、八〇年ワスカラン南峰を登頂している。

次に、今回採用したルートの傾斜が比較的平均しており、技術的にもそれ程難かしくなく、速攻登山を実行しやすいルートであったことがあげられよう。

速攻登山については、前から早いペースで登ることを実行し、その都度高山病で危険にさらされたことが報告されている。今回は、出発前に名古屋大学環境医学研究所で、四日間一日五時間の低圧負荷実験をうけ、効果があったと報告している。低圧負荷実験の効果については、登山者のひとりとして期待するところ大であるが、今の段階では、登山者を対象とした実験が始まって日が浅いこと、また実験と実際に高所でおこる現象との違いや個人差などを考えると、あまりはっきりと評価することには、まだ無理があるのではないか。この点については、登山隊付医師高橋氏の所見が本報告書にのってないのが残念である。

高度の面からみた山の選択は、五〇〇〇m級、六〇〇〇m級、そして七〇〇〇m級へと高度経験を積み重ねており、この会の堅実さがうかがわれる。

小人数の同人組織で、小規模・速攻登山による慕士塔格北峰の登頂と、川崎市の中学生と喀什市の中学生が画いた絵の交換会を通じ日中交流を果たしたことは、大変素晴らしいことである。

細部にわたるが、公式報告書として第一部に詩が入るなど、ユニークであるが、第二部・第三部ともすでに発表したり、記事になったものを網羅したため、重複する部分が多く、中味も不揃いになった感がある。しかし、登山後短期間にこれ程立派な報告書を出版した努力には、頭の下がる思いである。スビダーニエ同人の、今後一層の活躍を期待したい。

第一部、心象スケッチは、坂原氏の赤裸々な心情が吐露されており、同じ地域に入ったひとりとして、感無量であった。

一九八二年一〇月、スビダーニエ同人発行、坂原忠清編集、一七二頁、写真・カット多数、非売品

（川上　隆）

写真集　屋久島の四季

日下田紀三　著

屋久島は鹿児島県の佐多岬から約七十キロ南の海上に聳える山岳島である。

島の大部分は花崗岩の山地で、千米以上の山が三十六座、千五百米以上の山が十五座あり、海に面した外周部の千米前後の山々を前岳、宮ノ浦岳を中心とした中央部の高峰群を奥岳と呼ぶ。奥岳には九州第一の宮ノ浦岳（一九三五米）を始めとして、九州本土の最高峰九重山の中岳（一七九一米）を凌ぐ一八〇〇米以上の永田岳・翁岳・黒味岳・安房岳・投石岳などの山々がある。また前岳、奥岳の山々が幾重にも重なっていることから、総称して八重岳とも呼ばれている。

これ等の高峰群と共に屋久島の名を高めたのは屋久杉の存在である。樹令数千年の縄文杉を始め、大王杉・夫婦杉・紀元杉・八本杉などと固有名詞で呼ばれる古木、大木が、俗に「月に三十五日雨が降る」と言われる豊富な雨量に恵まれ、今もこの島に生き続けている。中でも縄文杉は樹令六～七千年とも推定され、一個体としては

ヒマラヤの民話を訪ねて

茂市久美子 著

毎年、多くの人がヒマラヤを訪れ、多彩な登山活動やトレッキングを展開している。そしてその報告書や写真集が刊行されている。しかし、シェルパやポーターたちの生活や風習を詳細に扱った報告に出会うことは稀である。

本書は、長い間ヒマラヤにあこがれ、ついに一九七七、七八年の二年間にわたって、シェルパ族の故郷であるクムブ地方やロールワリン地方を訪れ、シェルパ族の民話を採集して歩いた著者の紀行と、民話四十一篇よりなる本である。

全体の四分の一に当る紀行では、氷河のほとりに咲く青いケシの咲くヒマラヤで、ヤクを放牧しながら、山の神や川の神を信じつつ素朴に生きる村人たちの姿が、詩情豊かに描き出されている。厄年の男の厄払いの話、川に落ちた姉の助けを求めて家に戻った妹が、ろうあ者であるが故に、手まねが通ぜず、ついに姉を救えなかった話、チベットに住む恋人が崖から落ちて死んだ知らせを受け取った若者の話、雪の積もったある晩、牧童小屋でイエティを見てしまい、病気になった女の話、顔にはれものができた娘が、川で髪の毛を洗ったがために、川の神の怒りにふれたものと信じ、川の神に謝罪すると、はれものが治った話等々、まるで現代の昔話といった風情で語られている。こうした村人たちの話を通じて、ヒマラヤ山麓三〇〇〇～四〇〇〇メートルの高地に住むシェルパ族のきびしいけれどたくましい生活を、著者は優しい眼差しで語っている。

この紀行編は、あとに続く民話編へと読者をいざなう格好の読み物となっている。

そして、この民話編もおもしろい。民話の伝承や分布の問題などについては、評者は専門でもないので触れることはできないが、われわれもどこかで耳にしたことのある話もあり、また、日本に伝わる民話とは全く異質の話も多い。チベットの一大叙事時ケサール王の話も一部掲載されている。

ともあれ、日本ではすでに失われた風習であろうが、いろりを囲み、こうした昔話に耳を傾けるシェルパ族の人たちが、ヒマラヤの厳しい環境の中で、「タンボタンボ（昔々）」と話す語り口が聞えてくるようである。

タンボチェ僧院の壁画の写真を使った装丁も美しく、好感のもてる一冊である。

四六判、二五〇頁、一九八二年八月、白水社発行、一五〇〇円

（水野 勉）

ネパールの人々 II

（ネパール叢書）

D・B・ビスタ 著

田村真知子 訳

著者は、ネパール生れの、ロンドン大学及びウィスコンシン大学卒業生で、多年ネパールの奥地まで実地調査をし、その研究の綿密かつ広範囲に亘ることは、他の追従を許さぬ定評がある文化人類学者である。

訳された田村真知子氏は、数少ないネパール語の達人で、特に御主人の民族学者の助手として、つねに努力を続けておられる妻であり、母である近代女性の一人として認められている。

一言で「ネパール人」と言っても、その種族の多種多様であること、おまけに吾々にとって馴染のないカーストが実在する社会は、数ケ月滞在の観光客には、絶対に理解できないことだらけである。

吾々がこれら多くの種族に会えるのは、王様の誕生祝賀パレードの時、王宮通りに行列している数時間であって、しかも、その服装や飾りは、彼等独特の民族的重大な意味を持つものであるらしいが、どれ程の歴史的価値があるか吾々には分らない。

しかし、この「ネパールの人々 II」を読み、しかも、一つ一つを脳裏にこまかく刻みこんで、初めてその複雑な関係や仕組みが分るものである。が、しかし全然ネパールを知らない人にとっては、巻尾にある索引を最初に見る方が、てっとり早いかも知れない、と思われる程、こと細かに索引は吾々の質問、疑問に答える百科辞典的役割をしてくれる。僅か一頁の語彙解説もまた然り。

ヒマラヤ登山の前に、ネパール人とその社会を研究するには、またとない便利な本であるが、週刊誌をよむような軽い気分では、これは読めないことを付け加えておきたい。

四六判、三六五頁、昭和五十八年二月、古今書院発行、定価二五〇〇円

（佐藤 テル）

地球上で最も長い生命を持つ生き物のひとつとされている。

著者は元NHKのカメラマンで六年前「自然のアルバム」の番組づくりで屋久島を知り、その魅力に憑かれ何度か島を訪れる。その後、健康を害したのを機に、都会を脱して屋久島への永住を思いたち、五十六年一月NHKを退職して妻子四人と共に島に移住。農地を借り、農作物を作って暮らしを立てる傍ら、島の自然と人とを撮り続け、出来上ったのがこの写真集である。

本書は、昭和四十四年一月に八重岳書房から出版され既に絶版となった写真集『屋久島の自然』とほぼ同内容の写真集で、前述の山岳や屋久杉のほか、島の動植物から農林漁業に従事する島民の姿にも及ぶ、カラー七十一枚、モノクロ五十六枚の写真（百四頁）と、屋久島の植物と植生（宮脇昭、鈴木邦彦）、屋久島の動植物（岡留恒丸）、屋久島の歴史（三木靖）、風土と生活（日下田紀三）と題した四編の付文から成っている。

雪の宮ノ浦岳・永田岳等のカラー写真は新鮮であり、外箱やモノクロの屋久杉には生命の偉大さを感じさせるものがある。

山岳写真集ではない本書を、この欄で紹介することは内容的にも多少のためらいがあるが、著者や屋久島出身の出版社主が「開発の波にさらされようとしている屋久島を広く紹介することから屋久杉原生林の保護運動を広めようとしている」ことを思い、本書の紹介がその一助となればと思う。その意味でも、いずれ海上アルプスと言われる山岳や、或いは屋久杉だけに焦点を絞った写真集の出版を、著者や出版社に期待したい。

A4判、一二八頁、一九八二年十月、八重岳書房刊、定価五八〇〇円

（滝川 清）

東・西・南・北

穂高岳山荘 開設六十年

宮下　啓三

登山を一つの文化としてみるならば、その文化は登山史に麗名を残す少数の人々によってのみ成り立つものではない。登山文化の背景には、道路や鉄道の開発、用具や服装の改善、地図や測候の進歩などの要因がある。如何に山への愛情とか挑戦とかいってみたところで、背景となる条件の助けなしに登山はありえない。こうした条件の一つにかぞえられるものに山小屋がある。

一九二三（大正十二）年の夏、ガイドをしていた今田重太郎が、穂高岳に客を案内して登るうちに激しい雷雨に見舞われ、客の生命を預る者としての責任を感じたときに、避難小屋の必要を痛感した。これがそもそものきっかけであった。その翌年に彼は白出のコルに石室を造成した。これを起源として今年還暦を迎えた。当時は凡そ人の居住できる建物を造るのにふさわしいとは思われない高所の鞍部に、小屋を造ることを決意した重太郎さんに対し、その小屋にゆかりのある人々が共に祝い、その労をねぎらうべきいわれが十分にある。

前回の五十年の祝宴は、穂高岳山荘で催された。一九七三（昭和四十八）年の八月下旬、激しい風雨の日であったが、高所に集まった参会者の一人一人を重太郎夫妻は心からの感謝の意をこめて迎えてくれた。その模様は同年のNHKテレビの体育の日の特集番組として全国に放映された。営利だけを目当てにした山小屋であったならば、ありようもない心をなごませる山上の祝宴であった。折からの激しい風雨も、小屋の存在することの価値を参会者のすべてに実感させずにいなかった。

（撮影・広羽　清）

あれからまた十年、重太郎さんは八十五才を迎えて、元気ではあるが、また参会者も高令者が多くなったので、六十年の祝宴は、八月十九日（金）、今は新穂高温泉の名を持つ、上宝村蒲田温泉の彼の生家である今田館に会場を移された。この宴はたてまえとしては重太郎さんが山荘開設六十年を迎え、関係のあった人々に感謝の意を表することを目的としていたが、実際には積年の労に敬意をあらわそうとする人々の熱意が、会場を盛り上げていた。

同業者である近隣の山小屋の主人たちや地元の人々、親類縁者、日本山岳会員たちと、凡そ七十名の参加者は、三つの群に色分けできたが、和気あいあいの宴は皆を一つにとけこませた。そして約二十名の日本山岳会員たちが三田さんを中心に、安曇節を斉唱して重太郎さん夫妻の健康を祝し、重太郎さんは沖中さんとザイルを組んで安曇節にあわせて踊って、宴は最高潮に達した。観客の目には見えないところでせっせと精を出してきた舞台装置家を、ねぎらってでもいるような情景であった。

西穂山荘村上さん、槍ヶ岳山荘穂苅さんをはじめ、笠、双六、槍平、涸沢、岳沢等の山小屋主人たちが相共に重太郎さんの功をたたえていたのが印象的であった。翌朝西穂山荘へ戻る途中の村上さんは、前夜の宴で話相手になった私に「重太郎さんはえらい、人徳です」といった。穂高岳の高所山小屋の開発者というだけでなく、山小屋経営のあるべき姿の手本を示す人として、重太郎さんは北ア南部の他の山小屋に良い影響を及ぼしてきたことも、また大いに認識されなくてはならないと思う。

過ぎ去った六十年の意義もさることながら、重太郎さんの後継者になるであろう英雄さん、そして当夜の司会をつとめた神さんの得難いコンビによって、山荘が七十年、八十年をどのように迎えるのか。「これからも先をよろしく見守ってやって下さい」と小声で云った縁者の言葉の重みを感じた。

（JAC会員参加者）

三田幸夫、村井米子、今井喜美子、田口二郎、金尾実、平井忠兵衛、福井正吉、鳥居亮、難波清一、大森薫雄、錦織保清、広羽清、関口周也、鴫原啓佑、鈴木雄二、水越武、島田靖、田立泰彦、牧下一己、野添雅義、村上守、上條岳人、伊藤茂、神憲明、折井健一、宮下啓三。

『山日記』をご愛用下さい

白神山地視察行

自然保護委員会

白神山地の保全と青秋林道問題の視察と陳情を兼ね、8月25日から27日まで、自然保護委員会は、関係諸団体のメンバーと共に現地を訪れた。

参加者は、自然保護議員連盟の岩垂寿喜男事務局長、日本自然保護協会の中村芳男理事、木内正敏、工藤父母道研究員、日本野鳥の会の市田則孝事務局長、世界野生生物基金日本委員会の加瀬信雄委員、並びに当会自然保護委員会の国見利夫委員長、中村純二、中保、梨羽時春、武田満子、中村あや、市川義輝各委員の計十三名であった。

25日午後青森県庁を訪ね、中村農林部長、北嶋治山課長らに、また青森営林局では山本経営部長他に、広大なブナ原生林を次の世代に残す意義や、青秋林道の建設は南アスーパー林道の実状からもなお考慮し直す必要のあること、また標高四五〇米以上では十分杉も育たず、さらに山稜付近は地勢が急峻で地質がもろく、環境対策の解消などとても望めない。それにも拘らず、林道を貫通させることの無意義性などを訴えた。これに対しアセスメントを行うとの回答を得た。

夜は弘前に移動し、青森在住のJAC会員らの結成した、青秋林

道に反対する連絡協議会（会長奈良典明弘前大教授）の「白神の自然を語るつどい」に出席、根深誠会員、牧田肇弘前大助教授らによる、マタギの山を守ろうという訴えに、会は大いに盛り上った。

26日は現地視察のため5時にマイクロバスで出発、弘西林道を西に進み、青森側の択伐現場や、ブナ林を視察した。現地の永年の願で作られた弘西林道も、過疎対策の目的には殆んど使用されず、この日遭遇した対向車は半日間で僅かに十台、その中八台は伐採または工事用車であった。また択伐といってもいわゆる間伐でなく、部分的皆伐形式であって、植林の成果は期待できず、ブナ林の再生も極めて困難と思われる状況であった。同行のマタギ、工藤成元氏の言によれば、沢も次々に土砂で埋まり、イワナや鳥も激減しつつあるとのことであった。

午後は秋田側八森町から二ツ森に向い、青秋林道工事現場や凄まじい皆伐の状況を見学した。

夕方、秋田県庁で佐々木知事と会見、秋田側に僅かに残された約三千ヘクタールのブナ原生林について、保全の目的で検討を行いたい旨の回答を得たのは収獲であった。

夜は、JACの自然保護支部委員福田文二氏らも加わって活動している「白神山地のブナ原生林を守る会」（西岡光子会長）主催のシンポジウムに出席、単に県議会の賛成が得られたとか、国庫の援助を地元にもたらしたとかの政治的現時点的な理由でなく、より長期的、広域的な立場に立って、ゆっくり考え、話し合い、最も意義のある効果的な結論を得て実行に移すべきだとの意見が強調された。

27日は、秋田営林局で工藤営林局長らに会い、森林の存在意義は災害防止や木材の利用など功利的な面以上に、安らぎ、スポーツ、自然の恵、文化の起源、教育といった精神面にあることを訴え、また林野行政自体についても、大局的な検討を加えるべき時期に来ていることなど要望した。

今回の視察は問題解決の始まりに過ぎないものと言えるが、たとえば、県の自然環境保全審議会や農林部と営林局側で十分な意志疏通が見られず、さらに青秋林道の起点となる青森県西目屋村々長や村民、また秋田県八森町々長らと短時間ではあったが会見した結果、これまた当局とは別の意見が見られたなど、今後の運動の展開に大いに参考となる点もあった。

そして地元でも、これを機会に強力な運動の輪を拡げて頂くと共に、中央では、林野庁をはじめ関係各省庁に働きかける一方、国民一般に対しても、写真集やパンフレットその他を通じ、広くPRを行なって行く必要を痛感した。

終りに視察団のため、諸々の歓迎の行事やバスの手配、関係官庁やマスコミへの連絡などして頂いた上、現地の状況をいろいろ伝えて下さった、協議会や守る会の皆様、特に何かとお世話になった多数のJAC会員諸兄姉に、心から御礼申し上げる次第である。

（中村　純二）

北海道支部長
大塚武氏の遭難

北海道支部

当支部長大塚武は、去る八月二十七日より日高山脈神威岳（一六〇〇・五m）に登山しましたが、その後消息がなく、日本山岳会北海道支部の会員、北大山岳部員、一ツ橋山岳会員等多数の捜索も空しく、九月四日午後三時三〇分遺体として発見されました。

現場は、神威岳頂上から北北東に一・三km下ったところで、中ノ川源頭部の標高八七〇mの地点で、腕時計は三十日三時二五分で停っておりました。

山岳会の皆様より賜わりました御見舞、御配慮に対しまして、衷心より厚く御礼申し上げますとともに、多大の御心配をおかけしましたことを深くおわび申し上げます。（平野　明）

自然保護全国集会

自然保護委員会

本年の自然保護全国集会は、富山支部、富山県自然保護協会との共催で、講師に元中部山岳国立公園管理事務所長で現在日光所長である塚本静雄氏、県自然保護課長林信雄氏を迎え、八月二十七日、立山山麓家族旅行村の山野スポーツセンターで開かれた。

当日は生憎と青秋林道建設反対の現地集会と重なってしまい、当会メンバーも二手に別れざるを得なかった。その強行スケジュールをおして一路秋田より駆けつけた国見、中両委員を始め、参加者二十五名が揃ったところで、石坂委員の司会で開会。国見委員長の挨拶に続き、富山支部長であり、県自然保護協会長でもある若林委員が歓迎の辞と共に、協会結成以来二十年一貫して立山周辺の自然破壊をくいとめるべく奮闘してこられた経緯を述べられた。次いで全員の自己紹介の後、塚本氏より「国立公園の保護対策について」、林氏より「県のナチュラリストについて」と題する講演があり、質疑応答もまじえた二時間半、有意義なお話しが伺えた。お二人の話で共通していたのは、冬山や一般登山者が行けないような所でのゴミ対策にほとほと手をやいていることで、例えば剣三の窓、雪見酒でも楽しんだのか、一升壜や生ビールのアルミ空缶の山である事実を指摘され、JACで登山マナーにつきぜひ指導徹底して欲しい旨強調された。夕食の後はフィールドマナー・ノートを話題として集会が続けられ、主にその内容が登山者を送り出す側の発想でまとめられていて、地元としてはややもの足らないとの意見も出された。

翌日は貸切バスで称名滝を望見し、雄大な薬師岳、大日連峰を左右に、車道沿いの植生復原の状態を観察しながら、弥陀ヶ原を室堂平へ。ここで四班に別れ、各々ナチュラリストの方々と共に秋色が漂い始めた高原を散策、その活動振りの一端にふれることができた。

最後に、お世話になった富山支部の方々、自然保護協会の皆様に心からお礼を申し上げます。

（参加者）△委員会▽国見利夫、高遠宏、渡辺正臣、中保、遠藤光男、木名瀬亘、関塚貞亨、松本恒広、近藤緑、△富山▽若林啓之助、野島福三郎、石坂久忠、浜田文二、水井謹作、太田昭、岡沢弘、△関西▽仲西政一郎、△石川▽福久米之助、△秋田▽子吉格郎、△一般▽伊藤美恵子、ほか県自然保護協会々員五名。

（松本　恒広）

お知らせ

☎ 234-6659
この電話でもお知らせしています

もみじ会（第二十六回）

日時　十一月十二・十三日（土・日）
会場　朝霧野外活動センター
集合　東海道線吉原駅南口
十四時三十分貸切バスで会場に向かう。懇親会は十八時より二十時まで。
（東海道線は上り十四時十四分、下り十四時十一分吉原着の列車あり）
山行　富士御庭下り
十三日、八時貸切バスで五合目九時半。御庭→浅黄塚→三合目料金所（途中で中食）、山行を希望しない者は、バスで山麓回り三合目料金所へ。荒天対策は別に考えます。十四時発バスで吉原駅十六時着。（東海道線上り十六時十四分、下り十六時十一分に連絡）
会費　七千円
バス利用の有無、途中参加に関係なく同額。
申込　JAC静岡支部、振替口座名古屋四―二三六一〇に振込みをもって正式申込みとする。

現地連絡
昼間〇五四五―六一―八四一〇（田辺外科）
夜　〇五四五―六一―三一五四（田辺自宅）
主催　静岡支部

秋山山行

日時　十一月十二・十三日（土・日）
場所　那須岳
宿泊　三斗小屋
申込　山岳会事務局
締切　十一月五日
主催　集会委員会

科学研究委員会 第19回講演会

日時　十一月二十五日（金）　午後六時半
場所　日本山岳会ルーム
講師　岡山俊雄氏
題目　接逢面の研究と登山の思い出
岡山俊雄氏は、昭和五十六年度秩父宮記念学術賞の受賞者で、その対象となった接逢面のお話とともに、藤島敏男氏らとの当時の登山の思い出を話して頂きます。
主催　科学研究委員会

のみの市

日時　十二月三日（土）午後二時
会場　年次晩餐会会場
当日、市に出品される品物を募っています。集会委員にお申し出下さい。
主催　集会委員会

山岳写真技術講習会

山岳写真の第一人者、白籏史朗先生と小屋泊りで、山と山岳写真について語り合いながら、初冬の富士を対象とした撮影技術の講習を行ないます。
日時　十二月十・十一日（土・日）
午前十時より
場所　山梨県精進湖ヒュッテ（現地集合・解散）
会費　一万円（保険料、一泊二食宿泊料、雑費等を含む。交通費は各自負担）
定員　約三十名（先着順）
申込　山岳会事務局まで連絡。（計画書・申込書等送付します）
締切　十一月十五日（火）
作品講評　昭和五十九年一月二十八日（土）午後二時より、JACルーム
共催　指導委員会　青年懇談会

スキー山行（詳細次号）

期間　五十九年一月十三日（金）―十六日（月）
場所　栂池高原東京経済大学スキー小屋
集合　新宿駅西口スバルビル前、午後九時
主催　集会委員会

第三回委員会会議
役員・委員32名で五議題を討議

七月二十三日（土）午後一時半より五時まで、神田美土代町YMCAホテル会議室で、第三回委員会会議が開かれた。

毎年七月に開かれる委員会会議だが、第一回は、山岳会の活性化と支部交流がテーマ、昨年の第二回は、活発化した委員会間の交流と、行事・会議の調整がテーマとなり、今年の第三回は、過去二回の委員会会議の仕上げの色彩が強かった。

会議は議長に神崎総務担当理事、司会は関塚総務委員によって十五委員会、三十三名の委員が参加して開かれ、各委員会の現状報告、今年度の計画説明に続き、次の各テーマについて意見交換と討議が行なわれた。

〇会員懇談会の充実について

会員サービス強化の一環として、一昨年六月以降、総務・集会両委員会の共催で、毎月十五日を会員懇談会の開催日と決め、主に新入会員を対象として懇談会、講演会、映画会などを開催してきた。悪天候、PR不足などによって、会員の来会者が少なく、講師に失礼な場合もあった。原因にテーマの貧困など反省すべき点もあろうが、会員サービスの充実もカラ回わりしている。会員に魅力のある集会とするにはどうしたらよいか、そのPR方法などを討議した結果、「会員懇談会のテーマ充実」については、各委員会が持ちまわりで当番制とすることによって企画の貧困化、マンネリ化を防止する。「会員への通知徹底」は、会報の行事案内の欄を一定の場所に決め、少なくとも三カ月先までのテーマを決め、会報誌上に三回にわたって案内をのせる。毎月十五日が会員懇談会の開催日であることを会報でPRするなどを決めた。

〇委員会共同研究の推進

各委員会で検討する議題、今年度計画には、共通するテーマもあり、委員会の共同研究、合同委員会によって一層成果が期待できるものも多い。例えば自然保護と科学研究、安全登山、高所登山、遭難対策と医療、科学研究など、その他、図書とフイルム、総務、集会、青懇、海外委、婦懇など交流を考える必要があろう。

〇委員会の人材発掘と養成

委員会には専門的な知識を必要とする特殊なものもあり、ある程度、委員がやむを得ず固定する委員会もあるが、新しい人材の発掘と養成を、委員会は絶えず考えていかなければならない点で一致した。

○委員会の運営について

委員会活動は委員のボランティアに依存しており、各委員は委員会に義務感を持たないかぎり円滑な運営はできないし、活動しない。しかし義務感を強制されたり、圧迫感がでるようでは長続きしない。また少数の委員だけに仕事が集中したり、一部委員の突出で委員会活動がせばまったりする弊害も考えなければならない。前項の人材の発掘と養成も、委員会運営の一つであるが、要は委員が積極的にボランティア活動ができるような委員会のあり方は永遠のテーマである。委員長、理事、古参委員の努力する以外にはない。

○委員会連絡会開催の徹底

昨年八月以降、毎月最終月曜日に、集会委員会が幹事となって委員会連絡会が開かれている。各委員会のルーム使用、講演会、山行、支部との交流など、三カ月先までの各行事について、委員会間の調整を目的に設置されたが、連絡会に出席しない委員会も多く、徹底していない。各委員会は委員会連絡会に出席する委員を決めて、できれば事務局委員を任命して、かならず出席するようにしたい。

＜総務財務委員会＞

。神崎忠男、。西村政晃、関塚貞亨、石橋正美、帰山毅、藤井正彦、伊丹紹泰、大峰芳枝、（村木富士）、（高遠宏）

＜婦人懇談会＞

*小倉由美子、早川瑞璃子

＜青年懇談会＞

。絹川祥夫、板倉健二、（村木秀男）

＜学生部指導委員会＞

。村木富士、（板倉健二）、（絹川祥夫）、（伊丹紹泰）

＜海外委員会＞

吉沢一郎、（小倉由美子）、（早川瑞璃子）

＜自然保護委員会＞

*国見利夫、。高遠宏、松本恒広、（中村純二）、（松丸秀夫）

＜科学研究委員会＞

*中村純二、大木淑子、斎藤桂、小西奎二、（。高遠宏）、（松丸秀夫）

＜図書委員会＞

。松家晋、泉久恵、（平井吉夫）

＜フイルム委員会＞

（*中村純二）、（。松家晋）

＜山日記委員会＞

*松丸秀夫、。平井吉夫、伊藤文三、（泉久恵）

＜高所登山研究委員会＞

*金坂一郎、。平野隆司、（神崎忠男）、（堀井昌子）、（伊丹紹泰）

＜遭難対策委員会＞

（*金坂一郎）、（。平野隆司）

＜医療委員会＞

。赤松功也、北博正、黒石恒、堀井昌子

＜指導委員会＞

村木秀男

（*印＝委員長、。印＝担当理事、カッコ内重複）（関塚 貞亨）

編集手帖

この間のような気がするが、その後、七月末に蜂谷緑さんの出版祝賀会でお目にかかったのが、私にとって最後となった。その時はお元気で、安曇節の音頭をとられた。

▼八月十九日には、穂高岳山荘開設六十年のお祝いに出席され、本号に載った記念写真が遺影となった。死の二週間前の九月十五日、松方さんを偲ぶ会に出席されたのが、多くの会員の前に出られた最後であろうか。

▼折井さんは、会内に知友が多く、特に地方の会員との交友を大切にされた。「山岳会は東京中心に考えてはだめだよ」と、最後に会った時、私に言われた。私はそれを肝に銘じて、忘れはしない。M

▼最近、会の長老が相ついで亡くなられ、九月下旬にも林和夫・折井健一のお二人が物故者の中に入られた。

▼折井さんから、会報に加藤泰安さんの追悼文を頂いたのは、つい

昭和五十八年十月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五—四 サンビュウハイツ四番町
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 佐々保雄
編集代表 皆川完一
電話東京（261）四四三三
振替口座東京三—四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂